

「課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業」
領域開拓プログラム最終評価結果表

課題	行動・認知・神経科学の方法を用いた、人文学・社会科学の新たな展開
研究テーマ名	歴史科学諸分野の連携・総合による文化進化学の構築
研究代表者	井原泰雄
所属機関・部局・職	東京大学・大学院理学系研究科・講師
研究成果の総合評点：B	
研究成果に係る所見	
<p>文化進化学という新領域の主張は情報処理分析を通じて人間の文化の進化の過程を探ろうとするものであり、本研究では縄文・弥生時代、古墳時代、現代の数理データからそれぞれ具体的に考察した成果をある程度あげている。しかし、既存の考古学や人類学の水準を超えるような斬新な結果が得られたとは必ずしも言えない。研究目的では、進化学、考古学、認知科学、科学哲学の研究者が共同し、各分野の理論・方法を動員するとあるが、考古学的手法で得られた物質文化に関するデータ分析に基づく考古学的研究であり、特定の分野に偏らない総合的な文化の歴史の理解につなげることは不十分であったと思われる。特に重視されていた認知科学の観点からの考察が、報告書を読むかぎりではほとんど行われていない。さらに研究計画の段階では、西アジアと日本の先史時代の二本柱の考古遺物の検討に重きが置かれていたが、実際には日本に偏ったものになってしまった。イランのデータ収集を一つの柱という計画だったのにもかかわらず、分析調査が行えなかったことは大変残念であった。国際的な情勢とはいえ、西アジアの担当者はずぎず、何らかの別の方策をとるべきではなかったか。</p>	

※ 「研究成果の総合評点」に対する標語は下記のとおり。

- S. 研究目的に照らして、期待以上の成果があった
- A. 研究目的に照らして、期待どおりの成果があった
- B. 研究目的に照らして、十分ではなかったが一応の成果があった
- C. 研究目的に照らして、十分な成果があったとは言い難い